別紙２

令和７年度豊かなむらづくり全国表彰事業東北ブロック受賞事例

農林水産大臣賞

高松第三行政区ふるさと地域協議会

（岩手県花巻市）

高松第三行政区の皆さん

行政区を構成する３つの集落（平良木、内高松、母衣輪）は、人口減少に伴う地域コミュニティの機能低下や高齢化による農業の担い手不足、耕作放棄地の増加等が課題となっていた。

地域の有志が中心となりワークショップや研修会を開催する等、地域住民が主体的に活動に参加しやすくなるような研修等を地道に取り組んだ結果、主体的に関わる住民が増加し、高齢者の外出支援や見守り兼ねた配食サービス、除雪ボランティアに取り組む等、農村型地域運営組織（農村 RMO）としての活動につながっている。

令和元年度から平良木地区で実施しているスマート農業に対応したほ場整備事業では、担い手への農地集積も進めており、令和５年度には 63.4%まで集積され、事業が完了する令和８年度には、集積率が９割を超える見込みとなっている。

ほ場整備地区外の農地を活用して福祉農園を設置し、障がい福祉サービス事業所利用者や園児たちが交流しながら農作業に取り組み、収穫した農産物を加工し販売する等、高齢者や福祉サービス事業所利用者の所得向上につながっているほか、高齢者の見守りを兼ねた取組として、農園で収穫した農産物を活用した一人暮らしの高齢者への弁当配食や外出支援等、地域コミュニティの活性化につながる取組となっている。

ガマズミ収穫中の福祉農園

加工品のガマズミゼリー

高齢者への外出支援

農林水産大臣賞

入谷の里山活性化協議会（いりやのさとやまかっせいかきょうぎかい）

（宮城県本吉郡南三陸町）

南三陸町内で唯一海に面していない
入谷地区

入谷地区は、地域にある自然の恵みや伝統文化を生かした学びの場の提供や交流促進を図り、農業体験・モノづくり体験・調理体験などの体験プログラムの開発も含めグリーン・ツーリズムにも力を入れており、2011 年の東日本大震災においては、復興支援のハブ的な役割を担い、沿岸部の復興事業を応援してきた地域である。

2021 年、コロナ禍で迎えた震災から 10 年という節目の年に「このまま応援しているだけでは、震災前からがんばってきた入谷地区の取組が継承されなくなってしまう」と地域の中心にいた住民たちが、若者を中心とした人材育成や新たな事業創出などに動き出し、「入谷の里山活性化協議会」を起ち上げた。

構成員として、入谷地区の「食・体験・宿泊」を担うことができる各種施設の団体が加盟しており、「南三陸まなびの里いりやど」を中核(事務局)に、「校舎の宿さんさん館」、「ひころの里コンソーシアム」、「南三陸ＹＥＳ工房」、「南三陸農工房」、「入谷サン直売所」の６団体が主な構成員である。下は 20 代、上は 70 代と幅広い年齢層で、地元出身者も移住者も混ざり男女様々なメンバーで和気藹々と取り組んでいる。

また、入谷地区の農家が連携して育てた「しおかぜ葡萄」は、新たなブランドとして 2024 年から販売を開始し、生産者の所得向上につながっている。

「海と共に生きる町だからこその健全な山を保つ大切さ」も大事にしており、南三陸町観光協会と連携し、沿岸地域とも連携したツアーの受入れを行っているほか、町と連携して体験受入態勢の整備や里山文化交流事業の取組を強化するなど、住民・地域・行政が一体となってむらづくりを推進している。

廃校となった小学校を活用した
校舎の宿さんさん館

海外からのモノづくり体験受け入れ
南三陸ＹＥＳ工房

新たなブランド化を図った
しおかぜ葡萄

農林水産大臣賞

堀越集落（ほりこししゅうらく）（福島県田村市）

堀越集落の皆さん

「堀越集落」では、生産組合の構成員の高齢化や担い手不足による遊休農地の増加等の課題から、持続可能な集落営農の仕組み作りが急務となっていた。

これら集落の課題解決のため、ワークショップや先進地視察を行いながら検討を重ね、非農家を含めた住民が参加しやすく地域全体で取組めるよう、集落営農の公益部門と営利部門を分けた「法人２階建て方式」で再編成することとし、公益部門を担う「一般社団法人ほりこし創生会」と営利部門を担う「株式会社ほりこしフォーライフ」を設立した。現在、それぞれの組織で役割分担を行いながら、地域が抱える課題に対して取り組んでいる。

「ほりこし創生会」は、堀越地区住民(非農家含む)全戸が会員であり、農地中間管理事業の活用による農地の利用調整や地区の各行政区や老人会等と協力して農道・水路等の環境保全活動を行い、地区住民とともに農村環境の維持に取り組んでいる。

「ほりこしフォーライフ」は地区の水田の約６割を借り受けて中心的な担い手として営農し、遊休化した畑への牧草栽培を受託するなど、遊休農地解消にも取り組んでいる。また、農産物の加工にも取り組み、地元産コメを原料に発酵させた調味料「三五八」の加工販売を行っている。さらに、次世代の担い手の育成に向け、世代間交流を継続的に行いながら、地域農業を支える重要な役割を担っている。

環境保全活動の様子

遊休農地を活用した
牧草栽培

地元産コメを加工した
調味料「三五八」

東北農政局長賞

農事組合法人 鏡田ファーミング（のうじくみあいほうじんかがみだ）

（秋田県鹿角市）

組合員の皆さん

平成初期の鏡田集落は、兼業農家が大部分を占め、各農家が個別に農機具を所有するなど、独立した農業経営が行われていたが、担い手を中心とした効率的な営農を目指すため、平成 19 年に営農組合を設立し、平成 24 年に法人化した。

法人の主な栽培作物である水稲については、乾燥施設等を有する集落内の農家と連携し、作業の一部を委託しているほか、生産性の向上に向けて、直播栽培や密苗栽培を進め、経営の合理化を図っている。その他にも、えだまめやにんじんなどの生産・加工・販売に取り組み、特に、えだまめの選別作業では、構成員の家族を主体に集落住民に雇用の場を提供することで、地域経済の活性化に寄与している。

えだまめについては、丸果秋田県青果のオリジナルブランド「酒肴豆（しゅこうまめ）」として出荷され、首都圏で高い評価を得ているほか、業務用米については、フレコン出荷により商社と契約するなど、流通の効率化に取り組んでいる。また、６次産業化の取組として、法人内の女性部を中心に、規格外の農作物を有効活用し、地元の学校給食への提供や、キャロットジュースとして県内のスーパーで販売するなど、地産地消へも貢献している。

むらづくりの一環として、地域行事に積極的に参加しているほか、遊休農地の活用に注力するなど農地保全活動にも取り組んでいる。また、研修生の受入れは国内のみならず、ハンガリーやドイツからも受入れするなど、外部との交流により、集落の活性化を図っている。

販路拡大の取組

えだまめの選別作業

女性部による加工作業